

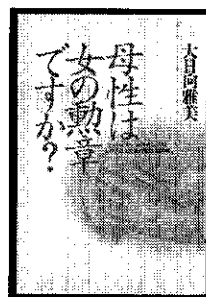
〈書 評〉

「母性は女の勲章ですか？」

大日向雅美著

20cm 310頁

産経新聞社発行 扶養社発売 1992年



「母性は女の勲章ですか?」という表題のついた本書は、所謂ウーマンリブ活動家の激しい主張ではない、一般に言う母性に鋭い学問的な目をあて、女性の立場から母性を見直すべき方向性を示したものと解釈したい。著者の大日向雅美教授は、母性や父性に関する研究者として知られ、恵泉女学園大学人文学部で心理学・女性学の研究と教育に従事し、私自身も研究や出版を通じて親しくしているし、国立公衆衛生院の教育にも非常勤講師として依頼している。

本書は、大きく第一部・第二部に分けられる。第一部では、「主として子どもをもたない女性たちの声」を収録しており、「子どもをもたない女性たちの生活や心のうち」が訴えられ、「女性でありながら母とはならない生き方が、いまだにたやすくなくことを示している。第二部においては、「操作される母性」と題して、世間一般の母性に関する考え方を研究や文献を介して、「母性に対して社会的文化的な操作が行われてきた経緯」を明らかにしている。特に、第二部では著者の幅広い研究の蓄積に基づいて、母性や子どもに関する問題を追及している。

第一部・第二部を通じて、保健医療に関わるものとして、いろいろと反省させられる問題も多く指摘されている。つい口から出た言葉が、多くの子どもをもたない、もてない女性の心を傷つけているかを、保健医療従事者はよく認識しなければならない。「自分という人間が、かりにたったひとつのものさしで計られるとしたら、はたしてどれだけの人々が納得するであろうか。女性の成熟が子どもを産むか産まないかでだけで計られることのつらさや不満、矛盾は、常にそうしたものさしを当てられる女性でなければ、分からないはずはない」という発言はまさしくそれである。ラジオ・テレビで育児相談をしている有名な小児科医がかつて、「育

児雑誌の表紙に有名タレントが自分が産んだ沢山の子どもに囲まれてニコニコしている写真を使え、今はファッションの時代だから、子どもを産む女性が増えるだろう」と発言された。少子化への危機感が根底にあるにしても、女性には子どもを産ませるという考えがあることの現われである。即ち、「女性の人生にとって母性の意味を余りに絶対視する社会の風潮」が強いことは否定できない。

第二部では、「母性への操作」が多く存在していることを指摘している。それも科学や学問という名のもとに操作が行われていると述べている。例えば、母児同室制を取り上げている。母児同室制とは分娩後母親と新生児とが同じ部屋で過ごすことで、母乳の確立が高いこと、早期から育児に慣れるなどの長所が強調されている入院体制の一つである。これに対して、「母児同室制そのものについては、このような客観的な検討が可能であるが、むしろ問題は、早期の接触が母子間相互の愛着の発達に有効だ」とし、それが「思春期の子どもの発達や母子関係にまで」良いことが多いといわれている点は大きな問題であると指摘している。この点については私も大いに賛意を表すが、異論を唱える研究者も多いと思われる。また、助産婦や保健婦のなかにも、この理論を短絡的に信じている人も少なくないことも事実であろう。本書はその短絡性を論じている。母乳推進運動についても言及しており、その視点は非常に適切であるが、一部の母乳推進派には耳が痛いことであろう。このように、母性に関して余りにも多くの「精神的盲点」があることを本書は指摘している。

母性についてじっくり考える機会を与えてくれる書である。

高野 陽 (母子保健学部)